

H-81

安徳天皇御事蹟考

272
1

特49

653

安徳天皇御事蹟考

大正
1.11.1
東京

▲はしがき

獲に久留米第十八師團參謀長であつた、古海麿島旅團長の談に曰く「苟も一天萬乗の陛下が御入水あらせらるべしとは覺えず、源平兩軍が眞劔で戦ふたのは攝津の福原迄であつて、八島の海戦からボチ／＼風流めき、なかには那須野與市が扇の射なごもあり、是れ等は既に義經、範頼と宗盛、知盛兩卿との間に、或る秘密の契約が成立した証據である。殊に壇の浦戦は範頼、義經の兩軍、海陸より平家を挾撃したが、多年平氏が鎮西に扶植した潛勢力は、一朝一夕の戦争位では到底抜くことが出来ぬ。又戦闘の盡きる目的もないので、源氏より大讓歩を爲し、帝の入水、知盛の戦死、宗盛父子の俘虜、國母の奉還と旨く狂言を仕組み、且

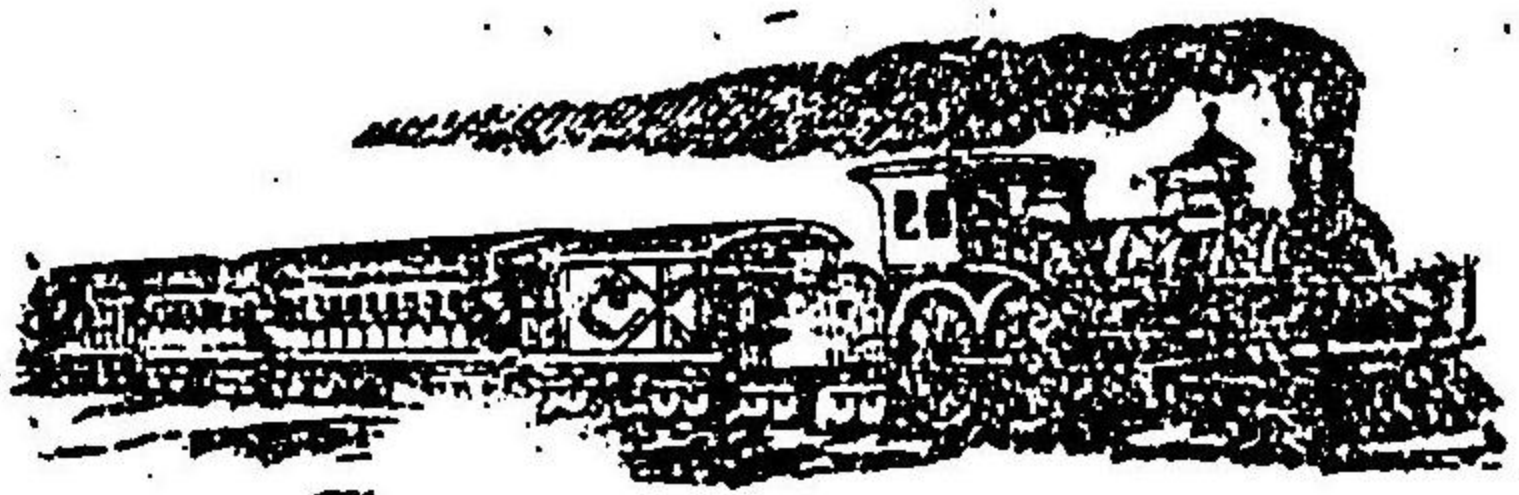
つ、帝御一行の御行衛は、義經より平家の幹部に指圖を致して、振旅したのである。頼朝大將軍の憤怒譴責は義經の武勇を怖れたので、又其勳功の猜妬心でもなければ國母と船を同ふしたとか、若くは梶原輩の讒言ばかりではなくて、實は言外し兼ねた心の煩悶言ひ換ひれば、義經自己の專斷で餘り平家を庇護した点にあるやうだ、左すれば義經は見上げた器量男で、血もあれば涙もある古今の名將英傑である、五月幟に武者飾等に、八幡太郎義家と並び尊重されるのも譯のあることであるやうに思はれます云々と述べられたのは實に卓見である、私は皇陵の湮滅を慨し研究刻苦數年竟に四十三年と四十四年の「九州日報」紙上に△安徳天皇筑後潜幸録▽と題し前後約三ヶ月に亘つて 陛下の

檀の浦御入水の非あること、御潜幸地としては筑後が最も適切なること、其他の傳説地は寧ろ久留米の徒たることを述べ其顯彰に励めましたことは讀者の熟知せらるゝ所でありませう、孰れ既掲の草稿は一經になし、修訂と増補を加へて諸彦の清塵に供する積りです、是を以て序文と致します

明治四十五年四月中旬

編者識す





◎肥前橋本莊左衛門尉平純一遺書(宗盛本位の傳説)

往昔壽永三年我平氏檀ノ浦ノ軍敗ル

安徳入皇ヲ供奉シテ豊前ノ國門司ヶ關ニ到艦ナシ頓テ長門ノ國豊浦郡豊浦ニ假ノ皇居ヲ設ケント議セラレシカレ決セズシテ筑前國龜戸山ニ登リ給ヒ日ナラズシテ太宰府ニ下向マシマシ觀世音ニ入給ヒ敵ノ襲ヒ來ラサルヲ歎ビ給フト雖モ永ク安居ナラサルヲ知リ宗盛深キ思慮アリテ大ナル鳳蓋ヲ製造シ終ニ發蓋マシク原田ヲ經テ肥前國基肆郡田尻ヲ過キ同國水屋ノ堤ニ至リ給ヒ千歳川ヲ渡リマシテ遂ニ筑後國御井郡小篠山ニ入ラセ給フ時ニ從徒總ニ五十余人ナリキ元來筑後國ハ平氏ノ領地廣ク小篠山ハ肥前ノ境ナル千年川ノ東岸ニ續キ其頃ハ猶竹林稠密ニシテ人家ヲ隔テ四方隱々トシテ壁牆ヲ成セルガ如シ此地ニ平氏ノ臣トシテ舊クヨリ住スル富豪ノ長者藤吉種繼ト云ヘル者アリ彼ノ早クモ出テ天皇ヲ奉迎シ從徒ヲ養ケルニ日ヲ逐テ募集スル者百有余人ニ及ベリ然ルニ敵亦襲ヒ來クレバ宗盛寧ノ急ナルヲ知リ

天皇ヲ種繼ニ守護シ奉ラシメ自ラ代テ

天皇ノ玉璽ニ乗シ錦旗ヲ麾カシ發誓ト偽リ行列ヲ整正シテ三木松原ニ出テ葦拔川ヲ過リ一條ヲ經テ尾島ニ至ル茲ニ其先重盛ノ建立アツク光明寺ト云ヘル寺アリ是ニ入ラントセラレシニ敵亦逐ヒ來リ鬪戰シ遂ニ敗レテ從者大ニ散亂ス此時從族淺山小十郎、淺山ハ歌道ノ名家ニテ其塚則チ今ニ尾島ニアリ一戰死セラレタリ漸ク戰ヲオサメ纔ニ十有余人ヲ從ヘ肥後ノ國ニ入り八代郡ノ山中ニ假ノ草屋ヲ營ミ潛匿シテ再ビ世ヲ起サント内慮アリト雖モ事成ラサレハ空シク年ヲ經テ

天皇ニ暇ヲ翼ヒ奉リ筑前國ニ趣キ海ニ航シ對馬ノ國ニ渡ラレタリ

天皇二位尼公ニハ小篠山ニ潛御マシマシ月日ヲ安消アラセラレ齡ヲ重ネ給ヒシカ爰ニ種繼ニ一女アリ常ニ奉仕ス

天皇モ亦之ヲ殊ニ寵シ玉ヘリ

天皇平生佛法ニ皈依シ玉ヒテ觀世音ヲ安置シ法華經ヲ讀誦マシマシケレバ女モ亦信心淺

カラザルニ女一夜偶然トシテ朝日ヲ吞ムト夢ミ孕妊ス月己ニ滿チテ男性生誕マシマシケリ頃ハ建久六年乙未六月十日ナリ後ニ出家シテ榮尊ト唱ヘ奉リ又則チ肥前國佐賀郡川上村萬壽禪寺ノ開山タリ偕テ

天皇ニハ建仁元年辛酉八月廿五日痘ニ罹リ崩御マシク玉フ時ニ御壽齡卅有五ニマシマシケル因テ平氏ノ遺臣等來リ集リ其式禮ヲ盡シ恭シク玉体ヲ埋葬シ奉リ續テ法華經ヲ一字一石ニ書寫シ棺ノ周圍ニ埋メテ陵ヲ設築シ奉リ傍ニ御遺物ヲ埋ミ觀世音ノ堂閣ヲ建立シタリケリ夫レヨリ星霜ヲ經テ小早川氏此地ニ封セラル、ノ日ハ則チ城ノ東南ニ在ス續テ元和七年有馬氏ノ封地トナリ城郭低小ナリト云テ舊城ヲ以テ本丸トシ廣ク外郭ヲ築クニ及ビテ皇陵堂閣ト共ニ安武村ニ移シ其地ハ現今有馬内記カ邸トナレリ時ニ皇陵堂閣移轉ヲナサントシテ穿堀セシ御遺物寶劍等ハ

天皇ノ尊名世ニ露顯センヲ憚ルモノナレバ其先同郡小森野村ノ藪ノ中ニ二位尼公ノ墳墓アルヲ以テ村民等擧テ小サキ祠ヲ營ミタリ仍テ此宮ノ神具トナセリ而シテ

天皇ノ陵ハ安武村ニ以前ニ同シク寶棺ノ周圍ナ一字一石ヲ以テ堅ク埋メ奉リテ一層ノ高
丘トナレ頂上ニ觀世音ノ堂闢テ遊覽シテ傍ニ一寺ヲ建立ナシ

天皇ノ尊蹟ナルヲ以テ日輪寺ト号シ法華經九萬部ヲ書寫シ埋メ奉リタルニヨリテ其邊リ
ヲ經九萬部小路ト云ヘリ情々西海ニ平氏ノ余黨隱匿スルノ地ヲ巡探スルニ宗氏ノ外皆農
商ト下リテ便リナシ抑々平氏ノ神祖タル

桓武天皇ヨリ累代治亂定リナク時運ヲ失ヒ給フ

天皇ニハ都外ニ陵跡ナキニシモアラネ此ノ西國 正シク

御寶体ヲ止メ給フハ

安徳天皇ノミ也然ルニ

皇族堂上ハ云フモ更ナリ士民ニ至リ其尊キ故ヲ知リ誰有

テ祭詞敬拜シ奉ルノ徒ナク辱クモ平氏ノ遠孫ニ生ル、而已ナラズ祖父義純此肥前國基肆
郡酒井村ニ笈テ止メラレシモ此地ハ宗氏ノ領地ニシテ左モ

皇陵ニ近キニヨリテ

早クモ御靈魂ヲ慰メ奉ル事ノ便利ヲ深ク慮リアリシ者ニシテ其遺念今ヤ我身ニ及ヒ片時
モ空シク過スベキヤト心ヲ懲シ不口嚴然タル 皇陵ノ尊名ヲ露シ奉リ尙ホ是ヲ平

氏ノ余黨ニ知ラシメ祭祠敬拜ナサシメント志慮スト雖モ元來有馬氏 皇名ヲ隱滅セ
ント議シタル者ナレバ詣拜スヲ旅人ヲ禁ヌ故ニ其 御期命ニ至レバ彼國ノ農民ニ身ヲ
ヤツシ窃ニ參籠シテ涙哭拜敬スルト多年我今齡已ニ傾キタリ因テ情ヲく相思フニ所詮
在世志願ヲ遂クルヲ難シ實ニ遺憾何ヲ以テカ是ニ比較セン子孫必ズ我心中ヲ察シ幾世ノ
後モ此地ヲ離レズ懈怠ナク詣拜尊崇シ時運ヲ待得テ皎然タル
皇陵ノ尊号ヲ顯露シ永ク仰敬シ奉ル可キモノ也

延寶八年二月日

橋本莊左衛門尉平純一花押

橋本市郎左衛門殿

◎肥後五家庄傳説

(清純本意の傳説)

六

平家の後が、五家庄に入り込んだる次第を尋ねると、當家の主人、緒方一學氏は長顔細目の風采、自ら秀でて、如何にも尋常の人で無いと思はる、が、口を開いて曰く

最初壽永年間、檀ノ浦の合戦に打破れたる主上 安徳帝を始め、宗盛父子、其他の公

卿武士の方々は、三方へ逃れなされた、一方の方々は、豊前から筑後の方へ潛み爲されついで對州とか言ふ島國へ越されました、之れは宗盛卿父子、及び其從者だと代々我家へ傳ひて申します、それから 安徳帝及び建禮門院(二位の尼の誤歟)其他の按察使

局などの方々は、矢張り筑後の方角へ行かれました、露野原、鷲野原とか云ふ地へ、留まり給ひしと云ふことで、其第三の方々が、即ち五家の此方へ來ましたので、小松宮左近衛大將の三男、左中將清經卿であります、此方々は、豊前柳ヶ浦より上陸なされ、主從唯六人、來られました、豊後の祖母嶽に留まりなされ、緒方實國(吾家の祖先)を頼り、三年餘り隠れおぼろぎして、實國の娘時姫と申す、十五歳の方を妻として主從七人

七

之れより薩摩へ落ちんとして、山賊の爲め妨げられ、之を従へて此の五家へ潛みましました、其の初めは白鳥山の麓に居りまして、後續かりて今日迄の所、四十七代七百二十餘年にあります

◎安徳天皇御事蹟考

吉野花風謹述

▲總 説

壽永四年の三月廿四日に源平の兩軍が長門の檀の浦で戦ふて平氏が竟に敗ましたので、安徳天皇が御入水遊ばし給ふたやうに「東艦」に傳へたのは跡方もない拵へことであります。夫れを家庭娛樂用の稗史讀物である平家物語なり、源平盛衰記、太平記等に喧傳しましてから、非常に世人讀者をして感奮興起せしめたのでありませう。成程源平兩家は鬱積した遺恨はありませうが、畏れ多くも一天萬乘の

今上皇帝に對し奉つて、いやしくも日本臣民たる以上は、誰一人だつて弓矢かうとする如何淺ましい根性はない譯である、殊に父君の 高倉上皇は非常に 幼帝の御身上に就て 敎慮を惱まし給ふたのであります、又た征夷大將軍源頼朝公なり、舍弟

範頼、義經の兩將軍にせよ同ト心で何んどかして 主上を救ひ奉り、 玉跡恙なく

京都の高御座に御遊し致したいの、山々でのりまゝて是れにはあらゆる手段を盡して
観ましたが、平家方では左う御手離することが出来なかつたのです、取分け平家の一門
中には、國母の建禮門院に外祖母君に渡らせらる、二位の尼が在し、第一人情と利害の
問題からして飽迄戴き奉つたいであります、然るに九重の雲深き御所では、左、永らく
高御座を空位にする譯に参りませんので、已むなく跡に、後鳥羽天皇が御位に即

せ給ふたのであります。一方源範頼、弟義経の兩大將と平家方の大將、内大臣平宗盛公
やら新中納言平知盛卿との間には或る契約が成立しました、と言ふのは戦争に際限がな
いから壇の浦海戦で結末をつけ、天皇清華高貴の方を御助け申す其替り趣意立として
僞主將に、國母建禮門院に御附副の女官武將を御渡し下さい、左すれば拙者の面が立つ
譯であるとの約束が取結ばれたのではあるまいかと想像されます。若し義経に斯様な涙
があつたとすれば彼は古今の名將で、血もあれば涙もある智勇仁義の大將である、宜な
る哉五月旗幟には祖先の入橋太郎と並び武者人形に飾られて崇拜されてゐるのも此譯で

せう、で彼が平家に対する態度が餘り寛大なので竟に兄頼朝公の諍怒、觸れた、當時の
ことは攝關の藤原兼實公の「日誌文」玉葉に據つて遺憾なく道破されて居ます曰く。義経
去る夜進飛脚申候去三月廿四日午刻長門國岡浦合戦す自午時正誦時、云伐取、云生取之
輩、不知其數、此中前内大臣右衛門督清宗、大納言時忠、全真僧都等爲生虜云々、又寶
物等御座之由同所申上也但舊主御事不分明云々。と紀され、其他△玉海▽△醍醐雜記返
本では西田直養の△養和帝入水考▽其他の諸書には孰れも檀の浦御入水を打消して居る
私も御入水説を取消す一人で开も畏くも、安徳天皇が九州の中央地である筑後に
御潜幸になつたものと主張するものであります

▲第一章 太宰府落

野史の説く所に憑りますれば、檀の浦戦に平氏敗れたので二位禪尼は今は是れ迄に
め、安徳帝に三種の神器を擁して船首に立ち、口に南無阿彌陀佛の信号を唱へつ
、今限の際に

今そ知る御裳濯川の流れには

四

浪の下にも都ありとは

と辞世の和歌を詠んで、さんぶと計り海水に投じたと唱へられ、又一方には否な按察使局が

帝を擁ぎ奉つて入水したのだと種々區々の説があります、左れと情々按トますに右の傳説は好事家が勝手に拵へた、一場の芝居狂言でありませう、何故とすれば帝、御一行は一先づ門司に御着船遊ばし、斯くて、國母の建禮門院は平家の一門と涙を揮つて西と東に御別れになり、按察使局は 國母並に平知盛卿の御諫に従つて、

主上の御伴を致すことになり、斯く平氏方では現在の肉身が生木を割く思を爲して袂を別つたのである。借て、

主上には二位禪尼並に内大臣宗盛、中納言知盛、按察使局、彌平兵衛宗清、伊賀平内なんどの人々を陪從遊ばし、太宰少貳原田種直を頼らん、
少人敷で、小倉から御上陸にあり、そして筑前の那珂の岩戸の假宮に暫時御安座にあり、斯くて南籬蕭々として殆んど徒歩勝で寶滿山 當時の竈戸山に登山あらせられ

わが後から白旗軍が追蹙して來るさにもないので一同は大變安堵された、そして

陛下は太宰府に行幸になり、轉じて觀世音堂に御避難遊ばしたがあたりは敵の人影すらない左れとまだく安心がされかい、其内頼才な宗盛公は深いく考へがあつて、大きな風箏を拵らへまして、自分は天皇だと觸れ出し

陛下の御一行と別れ、
あり、そうして自分の領分であつた肥前の鳥栖、田代に出でられて恩故古舊の義士を衆めたのであつた、其間に 安徳天皇は二位禪尼に平知盛以下を具奉遊ばし、一應筑

紫郡の安徳村笹栗の平家岩とか隠岩及び安徳台等を過させ給ふたに相違はありますまむ同地の裂山神社には、 先帝の御靈を鎮めまつる言ふこととであります。夫れより

帝の御一行は朝倉郡の甘木、八町峠を逾へて、筑後の浮羽原口に御出てまじになつたので同地に 安徳天皇の御座所だと傳へられた地名があります

第二章 筑後のれ道筋

如何に世が亂世と言へ、畏れも 一天宮乘の 天皇陛下が十つや八歳で斯く

蒙塵遊ばすのは、實に畏れ多いことであります。御道連の方々は孰れも婦女老弱の纖弱い人ばかり、疲れ切つた素足を運ばして原口から朝田村に一夜を明け、給ふた、同所に襪池があります、一説には

陛下が此池にも御入水遊ばしたと云ふ傳へて居ります。陛下が此池にも御入水遊ばしたと云ふ傳へて居ります。陛下が此池にも御入水遊ばしたと云ふ傳へて居ります。陛下が此池にも御入水遊ばしたと云ふ傳へて居ります。

が相違で、實はお行衛を晦ます計略でありませう。川曾村にも水天宮を祀つたお祠があります、又大野原村の久摩にも
陛下の御座所があります、かくて御一行は三井郡の旗崎から只今の千本杉を経て久留米に入ろうとの思召があつたらしく思はれます。先づ浮羽郡から九瀬川(一名巨勢川)を渡り、三井郡草野に御休憩あらせられましたので、御休憩所を南面松と稱へて居ります、かくて同所を御進發になろうとあされた時、茲に草野の領主、草野永平が謀叛を起こした計りで、行幸御道程に忌々敷血を視ました。抑々草野永經伴永平に奥州前九年の戦に入幡太郎源義家と戦ふて驍名を轟かした、阿部宗任の苗族である、最も宗任は八幡太郎に助命されたと言へ、祖先は源氏に攻亡ぼされたと言ふ骨髓に撒した深怨がある、夫れ故彼等父子は淨海入道お臣事したのであつた

が平家の没落と共に心變り緒方一味に加はり恩を仇に主家に弓彎やうにあふ、畏れも

一天萬乗の

陛下の菊の御紋章付の陣幕に向つて毒矢を放つた、御一行は婦人小

兒連、先方は屈竟お武者揃ひで蛙が毒蛇に睨まれたより未だく危険であります、茲に伊賀平内は玉躰を慮り知盛卿の御前に進み出で一策を献じ、そらして自分は知盛卿の身替となり殿戦せんことを願ひました、其忠憤義氣歴々と面に表はれましたので、知盛卿は心宜く是を諾し、主従親子が袂別の水杯を酌み交はしました、此時永平が放ちし悪戯矢が俎に中つた、かくて春の永い日もトツプリ暮れ、夜ははのくど白みました、時刻は宜しと平内は知盛卿の召させられた赤地の錦の直垂を譲り受け、是を鍔の上より着し白覆輪の鞍を置いた、葦毛の駒に打跨がり、「吾こそ平家方で音に名高き二位の中納言平朝臣知盛なるぞ、吾れと思はんものは討取つて高名手柄にせよ」と馬上悠々名乗り出でた姿は、寸分違はない本當の知盛卿のやうでした、敵は欺かれたとはしらす偽知盛の

伊賀平内目蒐けて集つた、平内は決死の覺悟で踏止つて戦ひまして多くの敵を討取りました、其内草野の侍大將たる合原外記が名乗出で、一騎打の戦を爲し兩將馬上むんと組んで落ちた所へ、草野の兵が上から組み重り合ふて終に平内の首級を揚げましたので凱歌を唱へて飯城しました、唯今草野の平に知盛塚といふのは實は知盛の身替に討死した、此の平内の墳墓であります。偕て忠臣伊賀平内家長の妻は武藏三郎左衛門尉有國の娘で、幼き二人の片身兒を連れて八女郡今寺村光明寺に便り、後ち新庄村に水住しました伴の荒人は荒人神に祀られ子孫は今に服部姓を名乗つて居ます。話は一寸外れたが主上並に平家の御一門は、そつと夜の間に南面松から御立退になり、會根傳に逆戻り遊ばして筑後川の支流である九瀬川に恙かなう落ちさせ給ふた、庄の前から御船に召させられたので、同所に庄の前大明神がおりますが、これは 安徳天皇を祭つたお社で、現に御神体は二位の尼が 帝を擁かれた木像だそです。かくて 帝の御

船は下流に従ふて宮の陣村の宮の地に着きました、宮の地の名稱も是れから起つたそうです、同地お祭れる高皇宮(俗おかうさん)は 安徳天皇を御勸請したのです

境内には官舎林もあります、夫れから 安徳天皇は陸行で唯今の佐賀縣三養基郡

旭村お御越になつたので、同地には丁度宮の地と元屋敷との間に御乗越と云ふ所があります、今は川底になつておますが、其頃迄は地續きで昔の筑後川は古川を流れて居たそうです、元屋敷に御駐轡にあつた行在所の址ださうで御乗越とは御途になつた坂道ださうと思はれます、抑々同地は宗盛卿の領分で、平家の遺臣古澤某(同地古賀泰藏氏の祖先)が身を山伏に悴し、山伏寺の通善寺を同地に建立して己は托鉢となり、 陛下を御隠

まゐ申したさうです、今に通善寺址の古墳古賀泰藏氏宅の五輪塔古墳は當時忠臣の墳で同家から代々祭祀と香華の手向を怠らぬさうです 又々同地大真木の立石儀右衛門氏も帝に因縁ある血統ださうで代々下野水天宮に仕へ、紋所は水天宮御紋章椿を用ひて居ますさうで兎も角珍らしき家柄です

▲第三章 久留米御臨幸

下野に御駐蹕中に久留米の舊臣で宿家の間へある、藤原経繼は笹山にゐる、自分の第宅内に御座所の修築が整ふたので、陛下を御迎へ申した、當時の種繼の址は唯今の川市篠山町星野房子の宅附近ださうです、又下野から久留米に御通輿になつた御成道路とは、小森野がありますが、孰れ御籠になつた意味でもありません、又た御道筋跡とは五寸杭の記念石柱が建て、あります。猶て久留米御漕座中に平内相宗盛朝臣は、股肱の臣を率ゐる。帝を慕ふて三養基郡水屋堤方面から、久留米の行在所に乗込されし、斯様な風で平家の舊臣が、朝貢を携へて、御笠輿下に集る兵員は百有餘名に數へられました、當時の笹山御所は竹林が密生して丁度障牆と廻らしたやうで、後は土が小高くて自然に城のやうに出来且つ人家もあつたに於て餘程要害な所でした。

▲第四章 平家と五家庄

豊前柳ヶ浦で月夜船頭になつて笛を吹いて入水された盛衰記などに附載され、

流才子小松内大臣の三男左中將清経並に新中納言知盛卿の嫡子四位少將知時、若くはを初め越中次郎盛次上總五郎兵衛忠光菊池次郎高直の主従は、帝と御、緒に楯の浦から落ち、御一行とは別れ、になり、元暦二年三月廿九日小倉の内裏に往かれ、夫れから道を西南に取つて中津方面に潜匿され、豊後の竹田の領に七年間浪人になられ、したのを、平家の舊臣緒方實國が之を聞きまして大變氣の毒に惟ひ、七月中旬に搜り出し清経以下を迎へましたので、一行は實國の舊館を感下、竊に海路柳ヶ浦から祖母岳なる實國が山庵に入られました、實國は清経王従を非常に款待しましたさうです、斯くて歳月は隙往く駒の逸早く、茲に三ヶ年間は空しく足を停めする、其内主人の實國は不治の病に罹つた、今限に臨み清経に向ひ、「微臣死んだ後は頼朝唯一人の娘無心細いであらませう、何卒御前の落させ給ふ所迄御召連を願ひます、是れが今世のお別れでありませう」と言つたなり永眠して終ひました、清経は實國が骸を手厚く埋葬しお預かりの法を以て終ふたので、實國が片身兒當年十五になる時煙と靈前にて晴れて夫婦とされた積

二一
經卿は十七の若公達、内裏雛にでも有りそうな夫婦とでも申しませうか。斯くて清經卿以下は旅装を整へて祖母岳を出發され、薩摩の島津家をたよるべし、今しも豊後の甯藏岡に差懸つた頃、長範頭巾の山賊が三十名程バツ／＼前に立塞がり、例の威嚇文句を並べ、應答の揚句斬懸つた、菊池次郎はカッ／＼打笑ひ山賊共を追拂つた上、十二人丈を捕縛し白刃を振舞して首を刎やうとした刹那、茲に先刻から藪影に隠れ容子を伺つてゐた、山賊の大將數馬が其場に平伏して乾分の命乞をした上で、一行六人を己が山寨に導きよした、是れが五家庄の起りて今日の緒方姓は清經卿の子孫で、緒方とは藤中時經の姓であらうか。

▲第五章 源軍笹山を襲ふ

源義経は京都に凱旋したが舍弟範頼のみは尙ほ九州地に停つた、そして日田三郎永隆等々引連れて久留米の笹山の御座所を襲ひました、宗盛公は事の急なるので自ら天皇の玉轡に乗せて行列を華に整へ錦旗を靡かして三本松原（唯今の久留米の三本松町）

に出で、芋抜川を横つて鑛泉で名高い、筑後八女郡船小屋途の一條を経て尾島み出ました、重盛公の皈依の寺院たる光明寺に隠れやうと致しましたが、源軍は火急に味方を追撃しますので、白河法皇（地名）の一の塚で味方は滅茶々に討ち惱まされ、茲で宗盛公の從臣淺山小十郎は花々敷最後を遂げました。塚は下町、興福寺の背後二の塚であります。此外秋松村の内瀬高、福島街道追分にも平家塚がある同地溝筋に赤井手と稱する地名があるが、是れは平家が敗走の際赤旗を井手に懸け忘れか儘潰走した所ださうです、範頼は散々に平軍を打取つて間もなく都に凱旋しました、同地二本松街道に小十郎妻室の墓がある、右は京にあつた妻が遙々夫を戀慕ふて西下し、打死と聞いて煩悶し清經の極自らも池中に投つて死んだと言ふ、哀れな情話がある、里人其志を憫んで同所に埋葬してやつたさうです、斯くて宗盛公は虎口を逃れ僅に十有餘人の從者を召連れて、肥後の八代に落ちて世を忍びました。

▲第六章 藤吉へ御避難

偕ても 安徳天皇は二位禪尼、按察使局の一行と俱に微服藤吉種繼に警護されて
 夜の間には笹山の御座所を連れさせ給ひ、同國の三瀨郡大善寺村藤吉當時藤吉竹指して
 落らさせ給ふた、多分此時分は夏の短か夜たろうと思ひますが、茲で夜もはがらかに明
 け東が白んだので同地を夜明と稱へ、後建つた寺院を朝日寺と唱ふるやうになりました
 かくて 陛下は恙なく藤吉の館に成らせられる。斯に藤吉種繼の娘に千代と稱して
 殊勝で利發でそして信仰心の厚い芳齡の令嬢があつた、大變觀世音菩薩を信仰して居ま
 した、同地に父種繼の建立した觀世音堂があります、千代女は茲に千日の間徒足詣を爲
 して居ましたが、或夜朝日を呑むと夢みて孕みましたが、月が満ちて玉のやうな玉男兒
 が御誕生になりました、時は建久六年乙未の六月十日〔肥前舊事〕には同月廿六日とい
 るので 陛下十八歳の 皇子であります。同地の不毛靈地は産殿でありませう

▲第七章 神子榮尊國師

筑後三瀨郡大善寺村夜明山朝日寺境内の般若泉とて 神子榮尊國師 雷を縛いたと唱

へ避雷の靈水とて、世人の崇敬せ。井戸は御産湯御用の井水である、鞍石は多分
 陛下笹山から落御の節御乗馬繫籠の記念樹であろう。後ち (陛下崩御後ならん)
 當國三井郡柳坂、永勝寺住持元琳法師の高第千光の御紹介で、三寶に皈依と給ふた。其
 後建保二年甲戌廿歳の時、肥前の小城柳小松山に庵を結ばれて、三ヶ年間海上の道を極
 められ、斯くて修業成就するや京師の東福寺關山博多承天寺住持とも云ふ聖一國師
 俱に肥前の平戸から商船に便乗され、大采明州に渡航され、學問修行に心身を専ら
 飯朝の途次海上で颶風に遭ひ、船方に轉覆しやうとした、時に宇佐神靈の御冥護で茅
 度御歸朝が出来た、一説によれば(肥前の口碑) 陛下二位の尼、産局と共に檣の
 浦より落ち肥前の唐津港に御遊舞、同港より平戸の御來屋を経て小城郡の古湯を過て川
 上の上を過つて佐賀の水上へ落させ給ふとあるのは、神子榮尊國師の歸朝と相違へたの
 で多分平家の遺臣女官とか唐津迄御迎へ見送などに出たのであろう。時ふ御齡四十九
 後嵯峨帝の寛元二年でありました、應て神子國師に達され、翌年夜明の朝日寺と其後

肥前水上の萬壽寺、杵島郡大町の報恩寺、筑前の薦福寺、豊前の圓通寺、妙樂寺、宇佐入麟宮内の彌勤寺の側に金堂を創立し肥前御所大明神(祭神安徳天皇)の石塔などを建立されましたなで殆んど牧峯に違はぬ位です。

二月廿日七十六歳で寂化された、尊賢は圓通寺に葬つたそうです。

第八章 白口明劍神社

話は外れましたが、安徳天皇は或年の師走の三十日に藤吉から、三瀨郡荒木、白口に成らせられたので、同地在住の土民は大喜びで、急に奉迎の準備に取かかりました。雞鳴一帯糊けて芽出度元旦を迎へたが、前日の大忙殺で年の餅状納に徳を布く暇がなかつたのか、其舊慣が今日迄傳はり、同地では元旦の年の餅にけ齒をの葉は布かないそうです。又た白口の住民悉く安徳姓を名乗り家紋、は五七、五三の桐の御紋章を使ふてゐますが、是れは

陛下に陪從して精忠を抽んでた千孫の証據で御紋章使用は、彼が精忠を敬感みらせられ、其際下賜にあつたものと想像されます。又た同地に御所の

跡ら、き地名がある、例せば、黒門、バシヨ山、南稜廓、北稜廓、陣ノ内、陣ノ前、陣ノ山等の床しい名稱が今日残つて居ますが、尙ほ此外 帝の寶劍を埋めた所だと傳へられて居る、明劍神社(一般に言ふ妙見神社とは別)があります、陵は確か丸形で田圃の中島になつて居る、周圍にはさ、やかな溝が立つて居るが、同丘は極めて神聖な所で耕耘の際過つて田圃の土砂を置いて見たり、或は木一枝、截つても木つ葉を取つても直ぐ祟られると言ふ、恐ろしい俗信があります。且つ境内の樹梢には塚の神火が昇つてあちこち飛ばれる、俗に明劍さんの豊年廻りと唱へ、神火の飛んだ方位は其年の萬作だと傳へられ今も尙ほ生きた傳説として崇められ、安徳姓の者は子々孫々河伯の憂がないと嘯されて居ます。迷信と一言に打消しはされるもの、什麼考へても、不可思議だと言ふ外はありません。斯くて 天皇は御閑居に天然痘に罹せ給ひ、 土御門帝

御宇建仁元年八月、寶算廿五(神子榮尊十歳の御時)で崩御あらせられた、後ち玉體は久留米の笹山藤吉の館附近に葬つたとあります。(水天宮利生記)に寶算廿八とあるは御發

興(秘喪二ヶ年間)の年を示したものと考へられます。

▲第九章 宗盛對馬落

始め源軍に追はれ筑後から八代に落ち延びた、宗盛父子は 帝の御在世中に赤旗を翻へさんとの志望が已まなかつたので、一先づ筑後に入り込み、そして 天顔を拜して永の暇を乞ひ奉り、伴の惟宗以下を隨へ、肥前の舊領地を経て筑前の宗像郡の博多の聖福寺に寄せたが、源氏の旗風が士民を靡さ一向面白く事業が捗らぬ、下頭の串崎志摩守やら鏡ヶ崎の壹岐直瀨方に潜匿された後ち、武藤筑前守資頼に拾はれ後堀河帝の元仁元年、賊徒に襲はれて冷水峠だの、彦山の梅本坊の奥院だの、或は黒川やら木屋瀬、又は肥前やら此所彼所に逃げ廻つた末、薬師如來の靈告に憑り、扁舟四十餘艘を仕立て、 後嵯峨帝の寛元元年に宗盛父子は對州に渡海されまして、地頭の阿比留國時を攻め亡ぼし全島を平定され、 後深草帝の建永元年九月十九日彼地で薨去になりました。遺言により從臣白石兵左衛門が骸を筑前の宗像郡内浦村放光寺境

内に葬つた、院号は「平等院三位宗盛幹大禪定門、建長元年九月一日」と銘じてある、其側にある古墳は籐内薩州島津家の出で、宗盛公は舊對馬藩主、伯耆の祖先であります。

▲第十章 知盛塚と宗清寺

筑後で平家の落武者を討ち取つて充分高名手柄を顯はした、草野三郎水平は日田三郎水隆は、天晴れ拔群の勤功だと頼朝將軍の覺れ芽出度、日田三郎は同國牛久木郡隈上庄に新知領を増され、姓を隈上に改め又た永經、永平親子は鎌倉に召出され將軍のお褒の賜を頂き、且つ將軍の取なしで 龍顏拜請仰せつけられて大に武士の面目を施し、筑後の内で三千町歩の領地増加にあり、武井城を移して鑿城を發心獄に搦へた、是に引替へ硬骨の彌平兵衛宗清は、檀ノ浦から 陛下の御一行にお伴仕つて筑後に落ち 尾島戦後味方戦歿者の怨靈と死後の冥福を祈る爲めに青道心になり、同地に草庵を結んだのが安福山、村崎院の宗清寺で同所に又た宗清の塚もあります、彼親爺が行衛不明とか

増ノ浦で戦死したのだと言ふことやら。鎧を背負ふて海中に投じたと言傳されてゐる、二位山納言平朝臣知盛卿の墓碁を今は二位尼、按察使局及び知盛對馬落と共に千古の疑問を破つた、生きた生命のある歴史たると信じます。猶て知盛卿の墓は舊竹野平村中尾(耳納山中腹)字平にあり、墓地には知盛卿の本像を安置してあり、其側には従者の墓標が二基あります、以前は久留米に向つて居たのを麓の道往來する時落馬するとか馬が狂ふとか云ふので御堂は後向に建直されたそうです。又知盛卿の家臣の子孫が同地に永住して居ましたが、有馬侯時代に住民は悉く浮羽郡本郷村に移され、其際系圖のち代々の遺物などは悉皆沒收されたそうです、唯今水繩村の平姓は其子孫である。知盛卿御堂の下は俗に知盛屋敷と唱へ、其上が發心山(草野の發心山とは同名異地)で平家の城塞だつたそうで、實は知盛卿の築かれたそうです、同將軍は水繩山(耳納山)とも屏風山とも云ふ)山越にて肥後の隈府より阿蘇男爵家の祖大宮内領内に往來し、知盛卿なり其子少將知時卿の一家眷屬が一時南郷家から隠れられたるものと云ふです。後

知盛卿は 主上を掩護し奉る爲めと一旗揚げやうとの考へから筑後の耳納山に住はれしも、再興の時機が來らず、 陛下は御隠になつたので、素志を翻へし茲で老朽

されて永眠されたものと思はれるが。同地は實に天險要害の勝區であります。

▲第十一章 阿蘇家と平家

阿蘇の内の牧み隠された平知時の末男儕は同所より遙々 主上を慕ふて筑後の鷲

野原(今の長門石下野、真木、久留米の一部で筑後川に添ふた平野か)に落ちたそうだが、而して阿蘇家は平家を隠匿したと言ふので頼朝公の譴怒に觸れ、終に所領は残らず沒收されたが、頼朝の切なる懇望により、富士牧狩の際牧狩奥秘の家傳を授けたので、頼朝公の御機嫌が直り、領地の幾分かを還付したそうです、故に平家は南郷家を徳とし、代々阿蘇家の世嗣祝には五家庄から屹度獸皮を送る、舊慣に志つて居るそうだが、左れと源氏を憚つたのか或は平家の爲を計つてか、一切平家に關することは記録がないうです

九州古文書の本元たる阿蘇家既に然り他は推測られる譯で、斯くして平家は暗から關に

秘密の裡に葬られたのでありませう。

▲第十二章 二位禪尼

安徳天皇に前後して二位禪尼も薨去された。

咲花の嵐の夢の一夜川

年月なみの千歳流れん

とは、禪尼の和歌であります。死体は久留米市外節原村舊久留米藩の彈藥倉庫附近に葬つてあつた、墓地の上には日輪寺御陵同様な觀世音堂を建て、あつたそうだが、明治廿二年頃國道開穿の節、朱詰の石櫃を掘出したそうです。最も「水天宮御利世紀」には

帝に先だたれたやうに説てあります。同地の尼御前社若くは兩官社などは、禪尼の靈を祭れるものであろう、同市新町(今廢社)の水天宮は小森野より遷宮になつたのである。

尼御前社の神体は、以前八女郡南長田村の石祠へ椿紋章入錦欄袋に納めてあつた。寶劍だそうです、(橋本の遺言狀)には 皇陵から發掘した寶劍とも唱へられて居ます

▲第十三章 伊勢と千代尼

國母建禮門院の入御の當初より宮仕を爲し、更に

陛下の筑後御幸に陪從し、

二位禪尼と心を戮せて精忠一日も渝らなかつた、當代の女傑節婦は、地籍使局の伊勢であらう、彼は大和國山邊郡石上、布瑠神社祠官の娘だつたそうです。久留米市洗心千代松神社は其墓地で又其靈を祀つたものと唱へて居ませよ私は藤吉神繼の女千代を祭つた社と信じます、 帝崩御の後千代は剃髮して 先帝の冥福を祈らん爲め笠原

下野元屋敷 (先帝の筑後最初の行在所で當時は筑後の一部であつた)に

御靈を奉

祀したのが久留米水天宮の濫觴です。千代尼は斯く一心不亂に奉仕してゐたが或時一人の沙門が訪ね来て、其志に感服し俱に法華經九萬部を供養して跡弔したとある。斯くて少將知時の末男儕も千代尼を訪ね来て祭祀怠らなかつたが千代尼も齡傾き跡の祭典剛潔が絶あると言ふので、互に胸を打明け茲に初めて浪人の儕を養嗣になして、

先帝の英靈を慰め奉ること、なりました、千代尼は文應二年(龜山天皇御宇)壽百八十

歳で逝去したと「水天宮舊記」にありますが、此長壽は按察使局の伊勢と、藤吉千代尼とを混同した相違から起つたので假に千代尼を先帝と御同年としても八十四歳の享年にありませう。

第十四章 水天宮の起源

平傳が三井郡國分の野中を往來の砌、詠まれた和歌がある、曰く

住みかてに野中の清水影見ても

もと住みなれし方を忘れぬ

これ筑後に來られた、何よりの証據であります、歌の意味から考ふれば肥後の住馴た所より、筑後の鷲野原に向ふ途中の述懐らしく考へられる。後ち肥後の下野元屋敷一行在所に庵を結んだので、同地を阿蘇の内の牧にちなんで眞木と唱へ、居住の跡を大眞木と稱した、是れが久留米水天宮眞木家の始祖で、姓を眞木と名乗つた謬であります。斯くて下野の水天宮は筑後川川水汎濫の爲め三四祠が瀬ノ下附近に流れつき、开る場所

近でもおぼは、同地庶民が不可議と思ふたのも無理ならぬと信じて、傳の祠宮に總新回天の勳を家なる贈正四位眞木和泉守保臣翁を出したが、是れも

帝の先天的御感化と云ふは歴史の遺傳性の賜など稱へるべきですが、環社司藤原氏は其發孫であります。傳と水天宮の御祭神は 安徳天皇は 高倉御中宮の國母建禮門院を指し奉る一三位時子以上の古様と、天御中主神である。御神体は皇陵が發見した 帝の寶劍と、また三座神居が 帝を護り、備は戒律の三位知盛の木像なども唱へ、御祭神は十六の菊花は梅花を使用されてゐる。殊に正月の神水祈禱などは極めて神聖で、敢て出雲の神火に譲りません、そうして神徳があらたで、世代は一般に崇敬して居まらぬの事があります

第十五章 出石藤吉の豪華

陛下を御救ひ申した皇家の長者藤吉藤原の祖先などは、無論稱はしません、凡庸の人物で

ないこと、身分の賤くないこと、素性の正しかつたこと等は、

々伺はれます。渠は實に隠れたる俊材、正史に顯はれなかつた忠臣でありませう。蒙
非を添はしむる材堪としては一

陛下並に平家の高貴河華を潜匿し其上自有餘
人を養ふに餘裕のあつたこと、三瀨郡大善寺村藤吉に

満宮を建てたこと、百大夫社に造廟、並に日本城初の中略子を造し、

代の建立にか、清福寺に慈師佛の本尊あり、又た朝日寺境内の觀世音菩薩並に觀音は

吉種繼の建立したるや、同地には莊大なる邸宅ありしを、同地の

の七郎八郎の兄弟を神靈に崇めてある邊から推しても、父子其非凡の

が想像される、種繼の子孫は久留米市内外に散在し、孰れも藤吉姓を名乗る

▲第十六章 平家の遺蹟

平家の遺蹟は海内に普く殊に九州西海中國等は其最著なるものあり、其遺蹟の
海外にすら平家落武者の遺蹟を傳ふる神話すらあり、此等の詳説は他日

た比較的顯はれた遺蹟は述べません、筑後に於て平家の遺蹟らしきものに、

門寺村東方に平家館跡の名を残し、同郡諏訪村西方及び同郡冠村の上の山と、

に平家城跡があり、舊上妻郡平村には重盛の墓もある、無論重盛卿の墓は京畿にあり

平家没落の際、平直能が慕隨いて骨を納めて西すところ、孰れ九州に下向した

たものでもませう、又生葉郡妹川村にも平家の城跡を止め、上妻郡藤林村にも

城址がある、耳納郡一番は平家の遺址が羅列し、十數年前に三瀨郡大溝村横溝、

三郎氏が山門郡柳河から華屋赤金泥の太木像を帶びましたが、是れ「大相國後

どかの銘があつたやうだ、多分淨海入道の位牌でありませう。筑後の五條

尚ほ平家の部落を爲してゐる様は、五家庄と變らぬ所でありませう、

▲第十七章 篠山の皇陵

安徳天皇の玉體は久留米笹山に殯葬しましたことは、△水天宮御利生記▽△水天宮神

記▽其他水天宮の諸記録、眞木家の家傳△筑後將士軍談▽△日輪寺附帳記▽同寺の

△橋本三言殿 皇陵の口碑等に傳へられ、殆ど枚擧に遑ない位なれば、今片鱗の餘地はありませぬ。井上春國の著明に

日の影の海におぼしと見渡つるは

時をまう間のひかひかりほし

實に千古の疑問を道破したものであります。御入水が囀であつたこと、是れが久留米に御潛幸遊ばしたことをば、既にお判りな覺があります。皇陵は久留米海浜有願堂の餘地に移封大國の際、藤原山城擴張の礎を皇陵を唯今の京町に移したと云つて、其建ち上り、有馬内記の居館と云ふのを鑑別久留米支店附近と云ふ、其間、藤原の時は、藤原の今江南山梅林禪寺の發跡としてある、二十四分直径の八角形の野臺一面を、藤原の遺蹟を遺したと云ふ。又皇陵の移轉を命ぜられたものは、文叔和尚であつたこと、當時京町は三添郡安壽村に屬し、宇を小松原と稱した法華經九萬部讀んだので、經九萬部小路と云ふ、後、京町は又、京町と云ふのが京町と改つたこと、そのこと、二輪寺は皇陵

と言ふので建てられ、皇陵の上には 陛下の御念が持佛觀世音像を安置する爲めに、觀音堂を建てましたが、往年旋風に吹倒されたまゝ、廢堂となり、皇陵と申すのは一段小高くて瓢形にあつて居ます、日輪寺の檀徒有志の意圖では堂閣の再建、寺院の改修皇名顯影に努力する考へで、行々は天下の輿論を喚起して、初志を貫徹する方針であります。微衷ながら我々も亦た同感する者であります。

明治四十五年五月一日印刷

明治四十五年五月 拾五日發行

▲定價金廿錢
▲特價金拾五錢▼

久留米市外鳥飼村白山三十二番地

著述者 吉野光俊

久留米市日吉町六ツ門外

印刷者 本莊直太郎

同所

印刷所 本莊集成堂

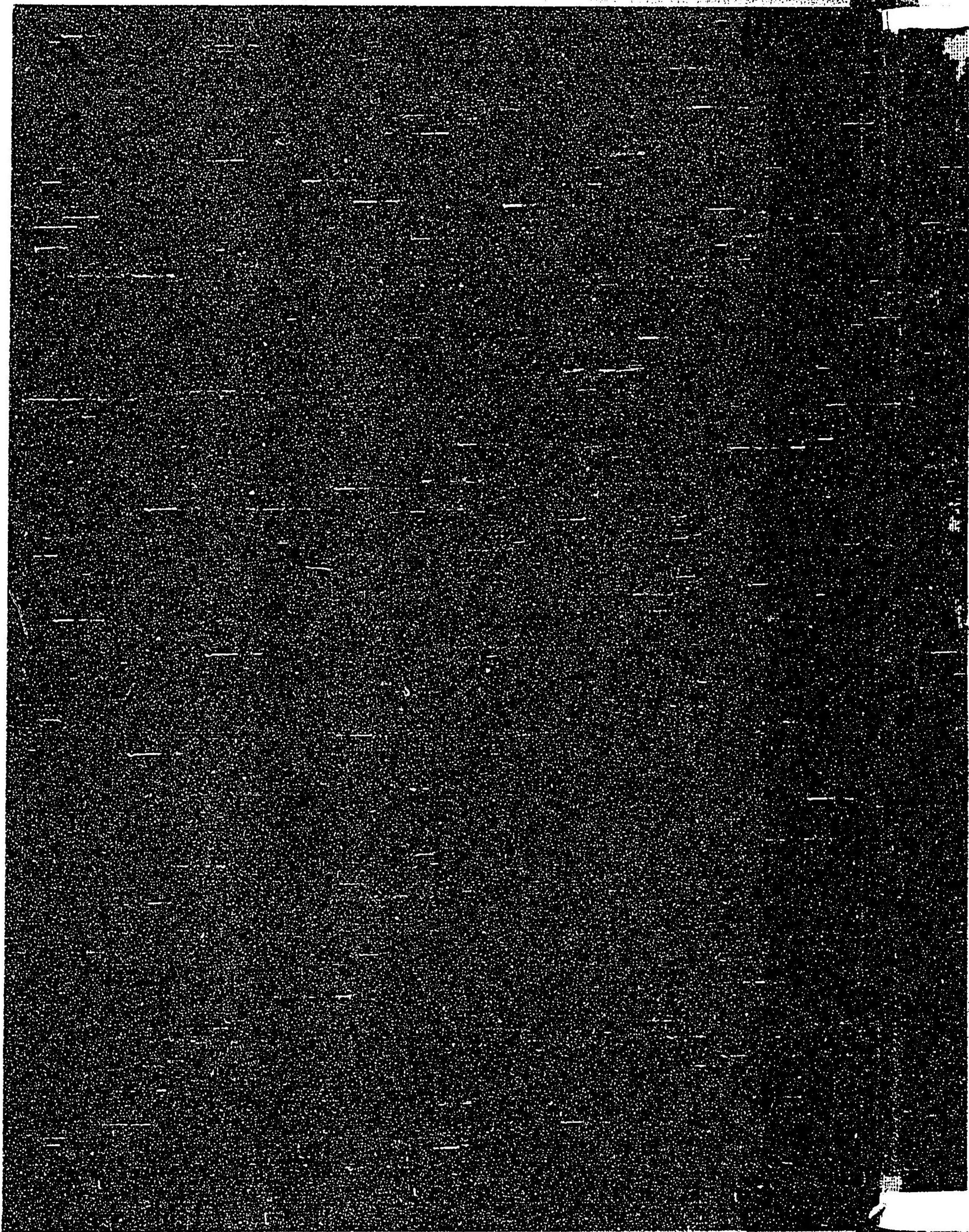
久留米市兩替町六十二番地

發行者 本莊三之丞

久留米市兩替町

發行所 本莊知新堂

17-81



3

安徳天皇御事蹟考

吉野光俊

国立国会図書館

006062-000-2

特49-653

安徳天皇御事蹟考

吉野 光俊 / 著

M45

ACJ-0002



特

6

